

執事は、霊座を片づけ、行ってしまいます。[主人以下は、大声をあげて泣きながら着いて行きます。来たときの作法のようにします。墓の門まできたら、尊長（目上の人）は、車馬（乗り物）に乗ります。墓を出て行ってから百歩ばかりで、卑幼（目下の人）も車馬（乗り物）に乗ります。ただ子弟一人を賤し、土を滴たすところから墳（墓の土盛り）ができあがるまでを監視させます]。

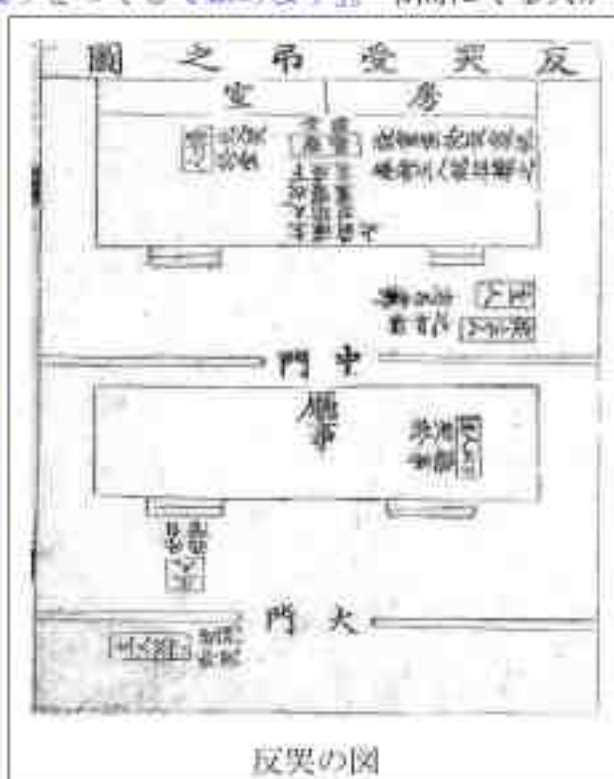
墳（墓の土盛り）の高さは4尺です。甕の前（甕の蓋）に小さな石碑を立てますが、これも高さは4尺です。趺（台座の石）の高さは1尺ばかりです。[司馬公は、こう言っています。「令式を調べてみますに、墳、碑、石獸の大小や多寡は、それぞれ官位の等級に応じた決まりがあるといっても、しかしながら葬る人は違い先のことまで考えに入れておくべきです。後世、これらのものを見れば、（それらが多ければ宝物も多く埋まっていると思うもので）どうして金品や宝玉が多く収蔵されていないと知ることができるのでしょうか。これはすべて亡くなった人に無益であって、かえって有害です。ですから、令式にも「富貴な人は貧賤な人と同じにできるが、貧賤な人は高貴な人と同じにできない」という文があるのです。そうであれば、これらを使用しないほうがすぐれているとしたほうがよいと言えます」。今、孔子が防という場所につくった墓の封（土盛り）の故事を調べますに、その高さは4尺でした。ですから、それを採用して原則とし、司馬公の説を使用し、別に小碑を立てるのです。ただし石は広さが1尺以上、その厚さは3分の2になるようにします。頂部をとがらせて、その表面に刻みます。これは誌石の蓋のようにします。そこで、その家系の各代の名前と業績を簡単に記述して、その左に刻みます。左に刻み終わったら、次は背面に刻み、背面に刻み終わったら右に刻むと言うように周囲にめぐらせていきます。婦人はと言うと、夫が葬られるのを待ってから立てます。表面は夫の誌石に刻んだように刻みます]。



第15章 反哭（帰宅して大声をあげて泣くこと）

主人以下は、霊車をおしいただきながら、道にあるときにはゆっくりと行き、大声をあげて泣きます。[その帰りは、親をあちらに置き去りにしていて気にな

るかのようにし、悲しみがこみあげてきたときには、大声をあげて泣きます。家まで着たら、大声をあげて泣きます。[門が見えたところで、すぐに大声をあげて泣きます]。祝（祝詞をあげる人）は、神主（位牌）をささげもって入り、霊座に置きます。[執事は、もとの場所に霊座を先に用意しておきます。祝（祝詞をあげる人）は、位牌をささげ持って入り、位置につき、位牌を櫃（箱）から出し、あわせて魂席も箱から出し、位牌の後に置きます]。主人以下は、庁事（庭先）において大声をあげて泣きます。[主人以下は、門にきたら大声をあげて泣き、入り、西階より登り、庁事（庭先）において大声をあげて泣きます。婦人は、先に堂に入り、大声をあげて泣きます]。霊座の前まで進んで行ったら、大声をあげて泣きます。[悲しみの限りをつくして止めます]。弔問にくる人がいたら、おじぎします。これは最初のようにします。[賓客（客人）のうちで親密な人が、帰ってきてから、反哭（掃宅して大声をあげて泣くこと）を持って、再び弔問することを言います。『礼記』『檀弓』に「反哭（掃宅して大声をあげて泣くこと）のときに弔問するのは、とても悲しいからです。家に帰ってみれば遺体すらなくなっており、これほど大切な人を失ったこと痛感させるものではありません」とあります]。服喪の期間が9か月の人は、酒を飲み、肉を食べますが、一緒に宴会を楽しみません。小功（5か月の服喪）以下の人、大功（9か月の服喪）でも別居している人は、家に帰ってもさしつかえありません。



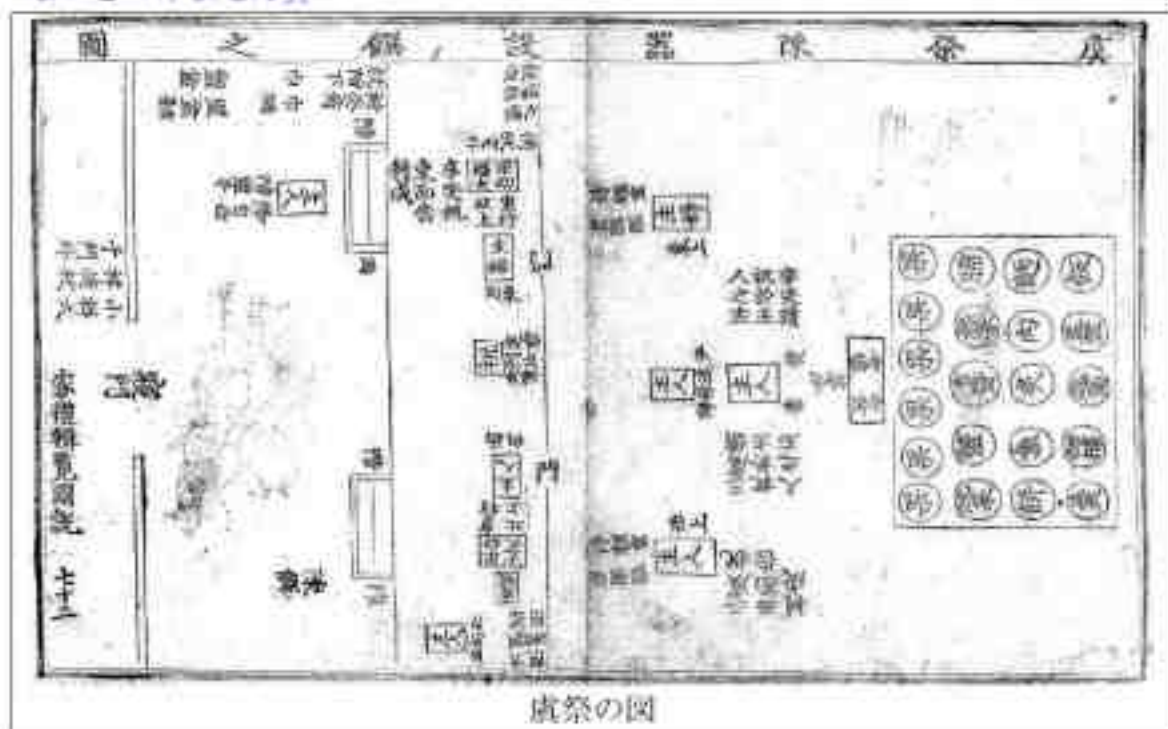
第16章 虞祭（埋葬後に掃宅してから行う忌み明けの祭り）[葬る日、正午になって虞祭を執り行います。場合によっては、墓が遠いときには、ただこの日ははずれないようにするだけでさしつかえありません。もし墓と家を往来するのに一泊以上の宿泊が必要であるときには、最初の虞祭は宿泊したところで行います。鄭氏は「骨肉は土に帰りますが、魂気はと言うと、あちこちさまよっています。親孝行な子は、さまよっている親の魂気のため、再三にわたって祭り、そうして魂気が安らぐようにします」と言っています]。

主人以下は、全員が沐浴します。[場合によっては、夜も遅くて暇がないなら、略して自分で洗い清めてもさしつかえありません]。執事は、道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。[盥盆（桶や皿）と帨巾（手ぬぐいやツキン）それぞれ2つを西階の西東に置き、南が上になります。東には盆の台があり、巾のハンガーがあります。西にはこれがありません。およそ喪礼は、すべて以上を手本にします。酒瓶と架一（酒びんを載せる台）は、霊座の東南に置きます。卓子（テーブル）をその東に置き、注子（水さし）や盤盞（皿と杯）をその上に用意します。火爐（コンロ）や湯瓶（湯の容器）は、霊座の西南に置きます。卓子（テーブル）をその西に置き、祝版（祝詞をはりつける板）をその上に用意します。蔬果（青物と果物）や盤盞（皿と杯）を霊座の前の卓（テーブル）の上に用意し、スプーンとハシは内側の真ん中に置きます。酒盞（酒の杯）はその西になります。醋椀（酢の皿）はその東にあります。果物は外側であって、野菜は果物の中にあります。酒を瓶に満たします。堂の中に香案（香炉を置く机）を用意し、香炉に火をつけます。茅を束ね、砂を集め、香案（香炉を置く机）の前に置きます。饌（お供え物）をととのえるのは、朝饌（朝のお供え）のようにします。堂の門の外の東にならべます]。祝（祝詞をあげる人）は、神主（位牌）を座に出し、主人以下は全員が入って大声をあげて泣きます。[主人と兄弟は、室外で杖によりかかっているわけですが、祭りの参加する人と一緒に全員で入り、その全員が霊座の前で大声をあげて泣きます。その位置は、全員が北に向きます。服喪の期間に応じた順番で並びます。服喪の期間の長い人は前にいて、短い人は後にいます。尊長（日上の人）は座り、卑幼（日下の人）は立ちます。丈夫（成人男子）は東にいて、西が上となります。婦人は西にいて、東が上となります。列ごとにそれぞれ年長と年少を基準にして順序を決めます。従者は後にいます]。神霊を招き寄せます。[祝（祝詞をあげる人）は、大声をあげて泣く人に泣くのを止めさせます。主人は、西階から降り、手を洗い、手をふき、霊座の前まで行き、お香を焚き、二度おじぎします。執事は、全員が手を洗って手をふきます。執事の一人は、酒をあげ、注（水さし）に満たし、西に向き、ひざまずき、注（水さし）を主人に渡します。主人は、ひざまずいて受け取ります。もう一人は、卓（テーブル）の上の盤盞（皿と杯）をささげ持ち、東に向き、主人の左にひざまずきます。主人は、盞（杯）に酒をくみ、注（水さし）を執事に渡し、左手で盤盞（皿と杯）を取り、右手で盞（杯）を持ち、これを茅の上にそそぎ、盤盞（皿と杯）を執事に渡します。ひれ伏して、立ち上がり、少し退き、二度おじぎし、もとの位置に戻ります]。祝（祝詞をあげる人）は、饌（お供え物）を薦めます。[執事は、これを補佐します。その用意の序列は、朝饌（朝のお供え）のようにします]。初献（酒をささげる儀式の一番目）を行います。[主人は、進んで注子（水さし）の卓（テーブル）の

前まで行き、注（水さし）を手に執り、北に向き、立ちます。執事は、一人が霊座の前の盤盞（皿と杯）を取り、主人の左に立ちます。主人は、酒をくみ、注（水さし）を卓（テーブル）の上にひっくり返して置き、執事と一緒に霊座の前まで行き、北に向き、立ちます。主人は、ひざまずきます。執事も、ひざまずき、盤盞（皿と杯）を進めます。主人は、盞（杯）を受け取り、三祭（食事のときに初めて実った稲をささげる儀式）の作法で酒を茅の束の上にそそぎ、ひれ伏して、立ち上がります。執事は、盞（杯）を受け取り、ささげ持ち、霊座の前まで行き、もとのところにお供えします。祝は、版（祝詞を書いた板）を手に持ち、主人の右に出て、西に向き、ひざまずき、これを読みます。前と同じですが、ただし「日月不居、奄及初虞、夙興夜處、哀慕不寧、謹以潔牲柔毛、粢盛醴齊、良薦裕事、尚饗」と言います。祝は、立ち上がります。主人は、大声をあげて泣き、二度おじぎし、また位置に戻って止めます。牲（いけにえ）には豚を使用しますが、そのときには「剛鬣」と言います。牲（いけにえ）を使用しないときには、「清酌（酒）、庶羞（いろいろなお供え物）」と言います。「裕」は「合」です。祖先に合わせて祭ろうとしていることです。重献（酒をささげる儀式の二番目）を行います。〔主婦がこれを行います。礼は最初のようにします。ただ祝詞を読まず、四度おじぎします〕。終献（酒をささげる儀式の三番目）を行います。〔親賣（親しい友人）の一人で、男か女がこれを行います。礼は重献のようにします〕。食事を勧めます。〔執事は、注（水さし）を手に執り、すぐに盞（杯）の中の酒を加えます〕。主人以下は、全員が出ます。祝（祝詞をあげる人）は、門を閉じます。〔主人は、門の東に立ち、西に向きます。目下の男たちは、その後について、二列にならびます。北が上となります。主婦は、門の西に立ち、東に向きます。目下の女たちも、目下の男たちのようにします。尊長（目上の人）は、他所で休みます。死者が生前に食事をしていた時間と同じだけの時間がすぎるのを待ちます〕。祝（祝詞をあげる人）は、門を開きます。主人以下は、入り、大声をあげて泣き、神霊に別れの挨拶をします。〔祝（祝詞をあげる人）は、進んで門の直前に行き、北に向き、喉払いをし、三回「啓門（開門）」と告げます。そこで門を開きます。主人以下は、入り、位置につきます。執事は、お茶をいれます。祝（祝詞をあげる人）は、主人の右に立ち、西に向き、利成（食事をささげる礼が完了すること）を告げ、位牌を櫃（箱）の中にしまい、もとの場所に置きます。主人以下は、大声をあげて泣き、二度おじぎし、悲しみの限りをつくし、止めます。出て次（とばりを張ってつくった控所）に入ります。執事は、お供え物を片づけます。祝（祝詞をあげる人）は、魂帛を埋めます。〔祝（祝詞をあげる人）は、魂帛を取り、執事をひきつれ、目立たなくて清潔な場所に埋めます〕。朝と夕の奠（お供え）をやめます。〔朝と夕に大声をあげて泣きます。悲しみがわいてきたら、大声をあげて泣くのは最〕

初のようにします。]

柔日がきたら、再虞（二度目の虞祭）を行います。[乙、丁、巳、辛、癸が柔日となります。その礼は、最初の虞祭のようにします。ただ期日の前日に道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。当日の早朝に起き、蔬果（青物と果物）と酒饌（酒を料理）を用意し、うっすらと明るくなってきたところで祭りをを行います。祝は、位牌を座に出します。祝詞の言葉は「初虞」を「再虞」に改め、「禘事」を「虞事」に改めます。そこが違いとなります。もし墓が遠く、途中で柔日がきたときには、これまた宿泊しているところで虞祭を行います。剛日がきたら、三虞（三回目の虞祭）を行います。[甲、丙、戊、庚、壬が剛日となります。その礼は、再虞のようにします。ただし「再虞」を「三虞」に改め、「虞事」を「成事」に改めます。もし墓が遠く、これまた途中で剛日がきたら、しばらく虞祭を行わないで、家まで戻ってからすぐに虞祭を行うようにしないといけません。]



第17章 卒哭（泣きたいときに泣くのを終わること）『礼記』「檀弓」に「卒哭では「成事＝めでたく祭りをを行う」と言いますが、この日はというのは、喪祭の代わりに吉祭を行います」とあります。ですから、この祭りは徐々に吉礼を使用するのです。]

三回の虞祭の後、剛日がきたら、卒哭を行います。期日の前日、道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。[いずれも虞祭と同じです。ただその他に玄酒瓶1つを酒瓶の西に用意します。]

当日の早朝に起き、蔬果（青物と果物）と酒饌（酒を料理）を用意します。[いずれも虞祭と同じです。ただその他に井花水（深夜から早朝にかけて汲んだ水）を取って玄酒に満たします]。うっすらと明るくなってきたところで、祝（祝詞をあげる人）は、位牌を出します。[二回目の虞祭と同じです]。主人以下は、全員が入り、大声をあげて泣き、神霊を招き寄せます。[いずれも虞祭と同じです]。主人と主婦は、饌（お供え物）を進めます。[主人は、魚と肉をささげて出します。主婦は、手を洗い、手をふき、麩米食（団子みたいなもの）をささげて出します。主人は、羹（スープ）をささげて出します。主婦は、飯をささげて出します。そうして進めます]。初献（酒をささげる儀式の一番目）を行います。[いずれも虞祭と同じです。ただ祝（祝詞をあげる人）は、版（祝詞を書いた板）を手に持ち、主人の左に出て、東に向き、ひざまずいて読みます。これが異なっています。文章は、いずれも虞祭と同じです。ただし「三虞」を「卒哭」に改め、「哀薦成事」の下に「来日隣禱於祖考某官府君、尚饗」と言います。以上を調べてみますに、祖考（死んだ祖父）と言うのは、亡くなった人の祖考（死んだ祖父）を言います]。亜献（酒をささげる儀式の二番目）を行い、終献（酒をささげる儀式の三番目）を行い、侷食（食事を勧める儀式）を行い、闔門（出て門を閉じる儀式）を行い、啓門（門を開いて入る儀式）を行い、辭神（神霊に別れの挨拶をする儀式）を行います。[いずれも虞祭と同じです。ただ祝（祝詞をあげる人）は、西階の上で東に向き、利成（食事をささげる礼が完了すること）を告げます]。これからは、朝と夕方の間には、悲しみがこみあげてきても大声をあげて泣きません。[ちょうど朝と夕方に大声をあげて泣くのと同じようにします]。主人や兄弟は、粗食を食べ、水を飲み、菜果（青物と果物）を食べ、席（むしろ）で寝て、木を枕にします。

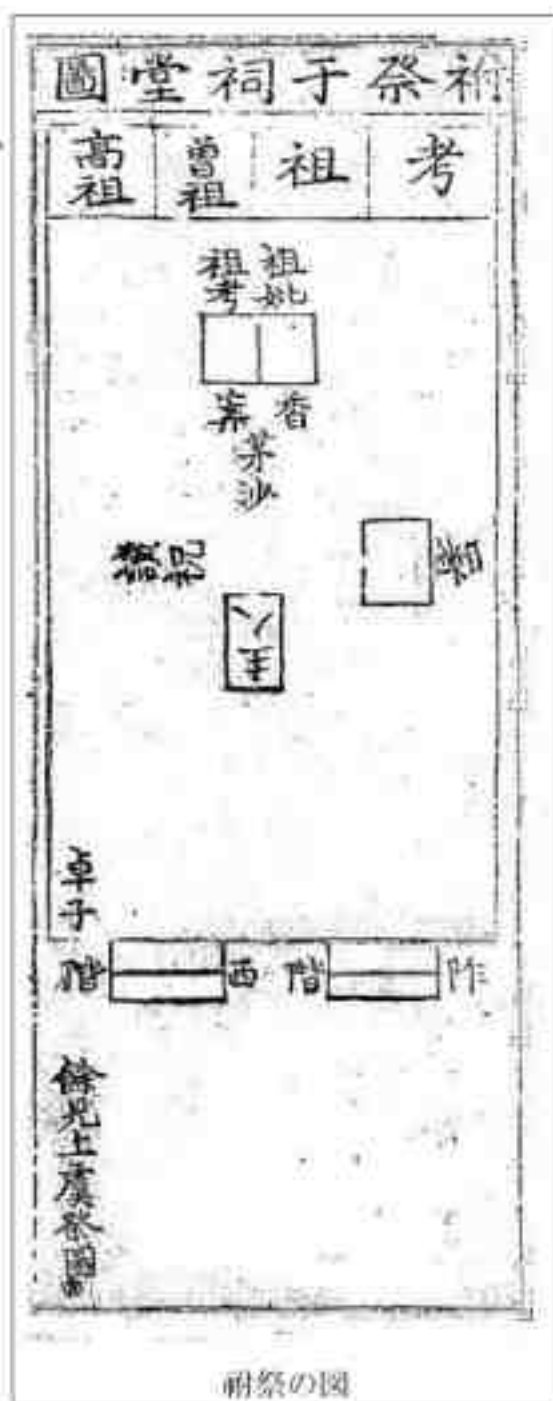
第18章 禘（祖考の位牌と一緒にして祠堂に祭ること）[『礼記』「檀弓」に「商代は、禘祭（小祥＝一周忌）を行ってから禘を行いました。周代は、卒哭（泣きたいときに泣くのを終わること）を行ってから禘を行いました。孔子は、商代のやり方がよいとしています」と言っています。期（一周忌）がきてから死者を神として祭るのは、人情として当然です。しかしながら、商代の礼法はすでに失われており、その本末については考えようがありません。今は、三虞（三回の虞祭）と卒哭については、すべて周代の礼法（周礼）の順序を使用します。そのときには、これだけが商代の礼法に従うわけにはいきません]。

卒哭の翌日に禘（祖考の位牌と一緒にして祠堂に祭ること）を行います。卒哭の祭祀が片づいたら、すぐに道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。[道具は、卒哭のようにします。ただこれを祠堂にならべるだけです。堂が狭いなら、廊下（庭先）において便利なところを選び、亡くなった人の祖考（死

んだ祖父)や祖妣(死んだ祖母)の位牌を中に用意し、南に向け、西が上です。亡くなった人の位牌をその東南に用意し、西に向けます。母の喪礼であるときには、祖考(死んだ祖父)の位牌を用意しません。酒の瓶と玄酒の瓶を階階の上に用意します。火爐(コンロ)と湯瓶を西階の上に用意します。饌(お供え物)をととのえますが、これは卒哭のようにして三人分とします。母の喪礼であるときには、二人分です。祖妣(死んだ祖母)が二人以上であるときには、生んでくれたほうの位牌を使用します。『礼記』「雜記」に「男子が祖父に合わせてまつられるときには、祖母も祭ります。女子が祖母に合わせてかつられるときには、祖父は祭りません」と言っていて、注に「尊者(上位者)になにかあったときには、卑者(目下の人)もそれに合わせるべきです。しかし、卑者(目下の人)になにかあったときには、尊者(上位者)をそれに合わせないものです(目下は目上に従うべきだが、目上は目下に従う必要はない)」とあります。

当日の早朝に起き、蔬果(青物と果物)と酒饌(酒を料理)を用意します。[いずれも卒哭と同じです]。うっすらと明るくなってきたところで、主人以下は靈座の前において大声をあげて泣きます。[主人や兄弟は、全員が階の下で杖によりかかり、

入って大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、止めます。以上を調べてみますに、祖父の後継ぎとなっている宗子(一族の代表)の喪礼を言っており、その世嫡(正妻の生んだ後継ぎとなる男子)で後継者となるべき人が喪礼をつかさどるなら、以上の礼を使用します。もし喪主が宗子(一族の代表)で



祭子の圖

ないときには、すべて亡くなった人の祖父の後継ぎとなっている本家が以上の
研祭をつかさどります。『礼記』「喪服小記」の注には「祖廟に合わせて祭ると
ときには、尊者（上位者）にこれをつかさどらせるべきです」と言っています。
祠堂まで行き、神主（位牌）をささげ持って出し、座に置きます。〔祝（祝詞を
あげる人）は、簾をまきあげ、櫃（箱）を開き、合わせてまつっている祖考（死
んだ祖父）の位牌をささげ持ち、座の内に置きます。執事は、祖妣（死んだ祖
母）の位牌をささげ持ち、座に置きます。西が上です。もし他所にあるとき
には、西階の上の卓子（テーブル）の上に置き、それから櫃（箱）を開きます。
もし喪主が宗子（一族の代表）でなくて、祖父の後継ぎとなっている本家と別
居しているときには、宗子（一族の代表）は喪主のために祖父に告げて、假の
位牌を用意して祭ります。祭り終わったら、これを片づけます〕。祠堂から戻り、
新しい位牌をささげ持ち、祠堂に入り、座に置きます。〔主人以下は、戻って重
座のところまで行き、大声をあげて泣きます。祝（祝詞をあげる人）は、主櫃
（位牌の入った箱）をささげ持ち、祠堂の西階の上の卓子（テーブル）の上ま
で行きます。主人以下は、大声をあげて泣きながらついて行きます。これは柩
について行くときの順番のようにします。門のところまできたら、大声をあげ
て泣くのを止めます。祝（祝詞をあげる人）は、櫃（箱）を開き、位牌を出し
ます。これは前の作法のようにします。もし喪主が宗子（一族の代表）でない
ときには、ただ喪主と主婦以下だけが戻り（宗子とその妻はついて行かず）、位
牌を迎えてきます〕。序列に従って立ちます。〔もし宗子（一族の代表）みずか
ら喪主となるときには、序列は虞祭の作法のようになります。もし喪主が宗子
（一族の代表）でないときには、宗子と主婦（宗子の妻）は阼階と西階の下に
分かれて立ち、喪主は宗子の右に立ち、喪主の妻は宗子の妻の左に立ちます。
年長であるときには前にいて、年少であるときには後にいます。その他は、こ
れまた虞祭の作法と同じです〕。神霊にお参りします。〔位置にいる人は、全員
が二度おじぎし、祖考（死んだ祖父）や祖妣（死んだ祖母）の位牌にお参りし
ます〕。神霊を招き寄せます。〔もし宗子みずからが喪主となっているときには、
喪主がこれを行います。もし喪主が宗子（一族の代表）でないときには、宗子
（一族の代表）がこれを行います。いずれも卒哭と同じです〕。祝（祝詞をあげ
る人）は、饌（お供え物）を進めます。〔いずれも虞祭と同じです〕。初献（酒
をささげる儀式の一番目）を行います。〔もし宗子みずからが喪主となってい
るときには、喪主がこれを行います。もし喪主が宗子（一族の代表）でないとき
には、宗子（一族の代表）がこれを行います。いずれも卒哭と同じです。ただ
し、酒をくみ、ささげるのは、先に祖考（死んだ祖父）や祖妣（死んだ祖母）
の位牌の前まで行きます。日子（年月日）の前は卒哭と同じで、祝版（祝詞を
はりつける板）はただし「孝子某謹以潔性柔毛、柔盛醴齊、適於皇某考某官府

君隣孫某官、尚饗」と言います。だれも大声をあげて泣きません。内喪（母の喪礼）であるときには、「皇某妣某封某氏隣孫婦某封某氏」と言います。次に亡くなった人の位牌の前まで行きます。もし宗子（一族の代表）みずから喪主となっているときには、祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じです。ただし「薦事於先考某官府君、適於皇某考某官府君、尚饗」と言います。もし喪主が宗子（一族の代表）でないときには、宗子（一族の代表）が呼んでいた呼び方を使います。もし亡くなった人が宗子（一族の代表）より卑幼（目下）であるときには、宗子（一族の代表）はおじぎしませぬ。重献（酒をささげる儀式の二番目）を行い、終献（酒をささげる儀式の三番目）を行います。[もし宗子（一族の代表）みずから喪主となっているときには、主婦（宗子の妻）が重献を行い、親賓（親しい客人）が終献を行います。もし喪主が宗子（一族の代表）でないときには、喪主が重献を行い、主婦が終献を行います。いずれも卒哭と初献の作法と同じです。ただ祝詞を読みませぬ]。脩食（食事を勧める儀式）を行い、闔門（出て門を閉じる儀式）を行い、啓門（門を開いて入る儀式）を行い、辞神（神霊に別れの挨拶をする儀式）を行います。[いずれも卒哭と同じです。ただし大声をあげて泣きませぬ]。祝（祝詞をあげる人）は、位牌をささげ持ち、それぞれもとの場所に返します。[祝（祝詞をあげる人）は、先に祖考（死んだ祖父）や祖妣（死んだ祖母）の位牌を籠の中に収納して蓋をします。次に亡くなった人の位牌を西階の卓子（テーブル）の上で収納して蓋をします。これをささげ持って霊座に戻し、門を出ます。主人以下は、大声をあげて泣きながらついて行きます。来るときの作法のようにします。悲しみの限りをつくし、止めます。もし喪主が宗子（一族の代表）でないときには、大声をあげて泣きながら先に行き、宗子（一族の代表）も大声をあげて泣きながら送り出し、悲しみの限りをつくし、止めます。もし他所で祭祀をしたときには、祖考（死んだ祖父）や祖妣（死んだ祖母）の位牌も新しい位牌のように（テーブルの上で箱に）収納します]。

第19章 小祥（亡くなってから一年目の祭祀）[鄭氏は「祥とは、吉のことです」と言っています]

期（一周忌）がきてから小祥を行います。[服喪からここに至るまで、間を計算しないで、全部で13か月です。昔は、日を占ってから祭りました。今は、初忌（一周忌）を使用するにとどめて、そうして簡易なものにしています。大祥は、これを手本にします]。

期日の前日、主人以下は、沐浴し、道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。[主人は、丈夫（成人した男子）たちをひきつれ、清掃し、洗濯します。主婦は、婦女たちをひきつれ、釜や甕を洗い、祭饌（祭祀のお供え物）をとと

のえます。その他は全員が卒哭の礼法のようにします。次（とばりを張ってつくった控所）を用意し、練服（柔軟で光沢が出るように加工した絹の服）をならべます。[丈夫（成人した男子）と婦女は、それぞれ別のところに次（とばりを張ってつくった控所）を用意し、その中に練服を置きます。男子は、練服の生地を用いて冠をつくり、首経、負版、辟領、衰を取り去ります。婦人は、長い裾を裁ち切り、裾が地面をひきずらないようにします。服喪の期間が一年である人は、吉礼のときに着用する礼服に着替えます。しかしながら、やはりその月いっぱい、金珠（装飾品）、錦繡（きれいな刺繡のもの）、紅紫（きれいな色のもの）を身に付けないようにします。ただ妻たる者は、やはり禫祭を行い、あと15か月を過ぎてから服喪を終えます]。

当日の早朝に起き、蔬栗（青物と果物）と酒饌（酒を料理）を用意します。[いずれも卒哭と同じです]。うっすらと明るくなってきたところで、祝（祝詞をあげる人）は位牌を出し、主人以下は入り、大声をあげて泣きます。[すべて卒哭のようにします。ただし主人は門の外で杖によりかかり、一年の喪に服する必要がある人たちで各自の喪服を身につけた人たちと一緒に入ります。もし服喪の期間が終わった人がきて、祭祀に参加する場合には、そのときも華美な服装をやめ、全員が大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、止めます]。そこで、出て、次（とばりを張ってつくった控所）に行き、服を着替え、また入り、大声をあげて泣きます。[祝（祝詞をあげる人）は、これを止めます]。神霊を招き寄せます。[卒哭のようにします]。三献（初献、亜献、終献）を行います。[卒哭の作法のようにします。祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じですが、ただし「日月不居、奄及小祥、夙興夜處、小心畏忌、不惰其身、哀慕不寧、敢用潔牲柔毛粢盛醴齊、薦此常事、尚饗」と言います]。侑食（食事を勧める儀式）を行い、闔門（出て門を閉じる儀式）を行い、啓門（門を開いて入る儀式）を行い、辭神（神霊に別れの挨拶をする儀式）を行います。[すべて卒哭の作法のようにします]。朝と夕方に大声をあげて泣くのを止めます。[ただ毎月の一と十五日に、まだ服喪が終わっていない人が集まり、大声をあげて泣きます。その服喪が始まって以来、親戚でまだ対面していない人は対面します。すでに服喪の期間が終わった人であっても、やはり大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、それから序列に従ってならば、おじぎします]。ここではじめて蔬栗（青物と果物）を食べます。

第20章 大祥（亡くなってから二年目の祭祀）

再期（二周忌）がきてから大祥を行います。[服喪からここに至るまで、閏を計算しないで、全部で25か月です。これまた第二忌（二周忌）の日を使用して祭るにとどめます]。

期日の前日、沐浴し、道具をならべ、饌（お供え物）をととのえます。[すべて小祥のようにします]。次（とばりを張ってつくった控所）を用意し、禫服（服喪が終わるときに着る服）をならべます。[司馬公は、こう言っています。「丈夫（成人した男子）は、垂脚の黼紗の幘頭、黼の布衫、布の裏角の帯となります。まだ大祥をしていない間、かりそめに謁者（取り次ぎ役）を出します。婦人は、冠梳、假髻となります。鶯黄青碧阜白を用いて衣服と履物をつくります。金珠（装飾品）や紅繡（きれいな色や刺繡）は、すべて使用してはいけません」。祠堂に移動することを告げます。[酒と果物をお供えして告げます。毎月の一と十五日の作法のようにします。親類関係のなくなった祖先のいないときには、祝（祝詞をあげる人）は、祝版を「うんぬん」と読みあげ、祝に祭祀をつかさどらせ、告げ終わったら、神主（位牌）の題目を変えます。加贈（位などを加えること）の作法のようにします。（祠堂の中には龕が5つあり、それぞれの中に祖先の位牌が世代順に安置されているわけですが）位牌を西のほうへ1つずつ移動させ、東の1つの龕を空にして、新しい位牌がくるのに備えます。もし親族関係のなくなった祖先がいて、それが別子（正妻以外の生んだ男子）であるときには、祝版（祝詞をはりつける板）を「うんぬん」と読みあげ、告げ終わってから、位牌を墓所に移動させて祭り、埋めません。それが支子（分家の当主）であって、一族の人間の中にまだ親族関係のなくなっていない人がいるときには、祝版（祝詞をはりつける板）を「うんぬん」と読みあげ、告げ終わったら、その位牌を一番の年長者の房（小部屋）に移動させて、その祭祀をつかさどらせます。その他、題目の変更や龕の移動は、前のようにします。もし親族関係がすべてなくなっているときには、祝版（祝詞をはりつける板）を「うんぬん」と読みあげ、告げ終わったら、阼階と西階の間に埋めます。その他、題目の変更や龕の移動は、前のようにします。

当日の早朝に祭祀を行います。すべて小祥の作法のようにします。[ただ祝版（祝詞をはりつける板）は「小祥」を「大祥」と書き換え、「當事」を「祥事」と書き換えます]。終わったら、祝（祝詞をあげる人）は、神主（位牌）をささげ持ち、祠堂に入ります。[主人以下は、大声をあげて泣きながらついて行きます。その並ぶ順番は、禰のときの序列のようにします。祠堂の前まできたら、大声をあげて泣くのを止めます]。霊座を片づけ、杖をつくのをやめ、杖を目立たないところに捨て、移動させる位牌をささげ持ち、墓のそばに埋めます。ここではじめて酒を飲み、肉を食べて、本来の寝床で寝るようにします。

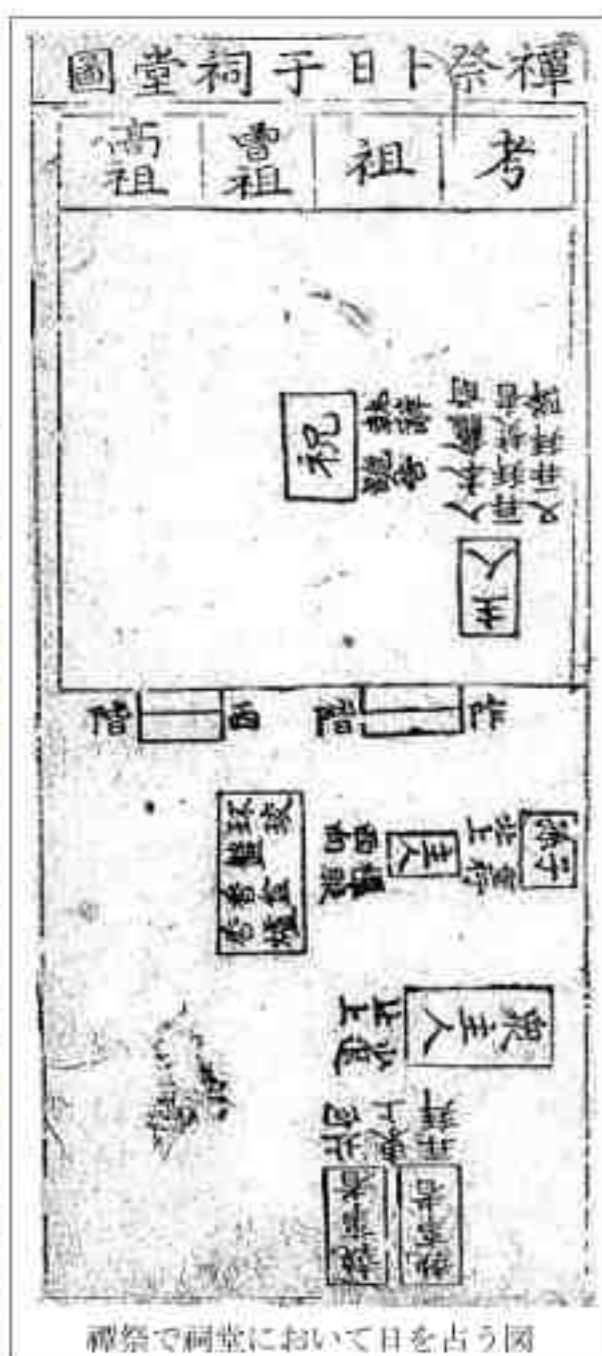
第21章 禫（服喪を終わる儀式）[鄭氏は「禫とは、あっさりとしていて、おだやかで安らかであるという意味です」と言っています]。

大祥の後、一か月をはさんでから禫を行います。[大祥と禫の間は一か月です。

服喪からここに至るまで、間を計算しないで、全部で27か月です。

前の月の下旬に日を占います。[下旬のはじめに、翌月の上旬から1日、中旬から1日、下旬から1日を選びますが、丁か亥の日を選びます。卓子(テーブル)を祠堂の門外に用意し、その上に香炉、香合(お香を入れる容器)、杯玦(吉凶を占う道具)、盤子(ボード)を置き、西に向けます。主人は、禪服で、西に向きます。各家の主人(兄弟)たちは、その次において、少し退きます。北が上となります。子孫は、その背後において、二列にならびます。北が上となります。執事は、北に向きます。東が上となります。主人は、お香を焚き、杯玦(吉凶を占う道具)をいぶし、上旬の日を指定して、「某將以來月某日、紙薦禪事於先考某官府君、尚薨」と言い、そこで盤(ボード)上に杯玦(吉凶を占う道具)を放り投げます。1つが表、1つが裏なら、吉です。吉でないなら、さらに中旬の日を指定して占い、さらに吉でないときには、下旬の日を使用します。主人は、そこで祠堂に入り、禪祭の対象となっている位牌の安置されている龕の前に行き、二度おじぎします。位置にいる人は、全員が二度おじぎします。主人は、お香を焚きます。祝(祝詞をあげる人)は、文章を手を持ち、主人を左に立ち、ひざまずき、告げて「孝子某將以來月某日、紙薦禪事於先考某官府君、ト既得吉、敢告」と言います。主人は、二度おじぎし、降り、位置にいる人たちと一緒に全員で二度おじぎします。祝(祝詞をあげる人)は、門を閉じ、退きます。もし吉を得られなかったときには、「ト既得吉」という言葉を使用しません。

期日の前日、沐浴し、位置を用意し、道具をならべ、饌(お供え物)をとと



禪祭で祠堂において日を占う図

のえます。[神位（神霊のよりどころ）を霊座のもとの場所に用意し、その他は大祥の作法のようにします]。

当日の早朝に祭祀を行います。すべて大祥の作法のようにします。[ただし、主人以下は、祠堂まで行きます。祝（祝詞をあげる人）は、主權（位牌の入った箱）をささげ持ち、西階の卓子（テーブル）の上に置き、位牌を出し、座に置きます。主人以下は、全員が大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。三献（初献、亜献、終献）のときは、大声をあげて泣きません。祝版（祝詞をはりつける板）の「大祥」を「禋祭」に書き換え、「祥事」を「禋事」に書き換えます。辞神（神霊に別れの挨拶をする儀式）まできたら、そこで大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。神主（位牌）を送り、祠堂まできたら、大声をあげて泣きません]。

第2.2章 居喪雑儀～喪礼を行うにあたっての雑多な作法

『礼記』「檀弓」に、こうあります。「死んだばかりのときは、うろうろして悲しくてどうしようもない感じにします。殯（かりもがり）のときは、キョロキョロして探し物がみつからない感じのようにします。埋葬のときは、あたふたして待ち望んでいるけど来ない感じのようにします。禋祭が終わったら、悲しんで心が乱れている感じにします。大祥が終わったら、ぼかんとした感じにします。「顔丁は、服喪の仕方がよかったです。死んだばかりのときは、あたふたして待ち望んでいるけど来ない感じのようでした。殯（かりもがり）となると、まっしぐらに後を追うのだけど追いつけない感じのようでした。埋葬したときは、がっくりとして帰ってこない人を持っているような感じでした」。

『礼記』「雜記」に、こうあります。「孔子は、こう言いました。少連と大連は、服喪の仕方がよかったです。死んでから三日、手を抜かずに喪礼に励んだ。死んでから3か月、気を抜かずに喪礼に励んだ。死んでから一年、悲しみにくれていた。死んでから三年、ふさぎこんでいた。東夷（東方の異民族）の子である」。

『礼記』「喪服四制」に、こうあります。「（その人の服喪の仕方によって、その人となりわかります）仁者なら、その愛情のほどが観察できます。知者なら、その理性のほどが観察できます。強者なら、その意志のほどが観察できます。礼法に従うことで、喪礼をきちんと行えます。正義に従うことで、喪礼を正しく行えます。親孝行な子、目下としての本分を守れる目下、貞節な婦人についても、すべて服喪の仕方によって判別できます」。

『礼記』「曲礼」に、こうあります。「服喪していて、まだ埋葬していないときは、「喪礼」を読みます。埋葬が終わったら、「祭礼」を読みます。服喪が終わり、ふだんの生活に戻ったら、「楽章」を読みます」。

『礼記』「檀弓」に、こうあります。「大功のときは、仕事をしません。ある人

は、大功のときに書物を読んで学んでもさしつかえない、とっています」。

『礼記』「雜記」に、こうあります。「三年の服喪の期間中は、少し言うことはあっても、長く語ることはありません。聞かれて答えることはあっても、みずから質問することはありません」[言うとは、自分のことを言うことです。人のために説明するのは、語ると言います]。

『礼記』「喪大記」に、こうあります。「父母の喪礼においては、喪礼に関係のないことであれば言いません。埋葬し終わったら、(公式の場において)他人と一緒に立つときには、君主は、王事を言っても、国事を言いません。大夫や士は、公事を言っても、家事を言いません」。

『礼記』「檀弓」に、こうあります。「高子(魯)が親の喪に服していたとき、衛を見せるところを見たことがありませんでした」[衛を見せるとは、ほほ笑むことを言っています]。

『礼記』「雜記」に、「服喪の種類が齊衰のときは、埋葬し終わったら、人が会いたいと求めてきたときには会いますが、こちらから人に会いたいと求めたりしません。小功のときは、人に会うことを求めてもさしつかえありません」とあり、さらに「およそ服喪について、小功より上の喪に服するとき、履、紺、練、祥でないなら、沐浴はありません」とあります。

『礼記』「曲礼」に、こうあります。「頭に傷がついたときには、沐(頭を洗うこと)をします。体に瘍(できもの)ができたときには、浴(体を洗うこと)をします」。

『礼記』「喪服四制」に、こうあります。「百官(いろいろな役人)がつき従い、百物(いろいろな物品)がそろい、言わなくても物事をしてもらえる人(王侯貴族)は、体をささえてもらって立ちます。言いつければ物事をしてもらえる人(中産階級)は、杖をついて立ちます。物事をするためには自分で動かないといけない人(庶民)は、服喪しているときに顔を汚れるにまかせて自分で立ちます」。

およそ以上は、すべて昔の礼法です。今の賢明で親孝行な君子(りっぱな人)には、きっと以上をやっけてしまおうとする人がいるでしょうが、その他のことは時代を見て、実力を考えて、かくしてこれを行っても、さしつかえありません。

第2.3章 状文格式～文書の書き方

1. 致贈奠状～奠(香典)や奠(お供え物)を差し上げるときの書状

具位姓某(相手方の名前)

其物若干(贈り物の数量)

右、謹んで某人（死者の名前）の霊簾にとりあえずお供えする樽儀（香典）〔お香、お茶、お酒、食事は、「奠儀」と言います〕をお送りし、たてまつります。伏して思いますに、お受け取りください。謹んで記す。

△年○月×日 具位姓某（差出人の名前）〔降等は「年」を用いませぬ〕記す
封皮（手紙を包むためのもの）に記すこと～某官の霊簾に書状を差し上げます。具位姓某（差出人の名前）謹んで封ず〔降等は、すなわち面簽を使用し、「某人に霊簾に書状を差し上げます。具位姓某、書状を謹んで封ず」と書きます〕

2. 謝状〔服喪の期間が3年で、まだ卒哭が終わってないなら、ただ子姪（子や甥や姪）に感謝を伝える書状を出させます〕～感謝の書状

具位姓某（相手方の名前）

其物若干（贈り物の数量）

右、伏して尊慈（心配り）をいただきました〔降等は「尊慈」を「仁私」とします〕。私（手紙を出す人の名前）は、私の親の違世（死去）によって〔大官は、「違世」を「薨没」とします〕、特に樽儀（香典）を賜りました〔同輩は、「賜」を「配」とします。奠なら「奠」とします〕。自分の感情をどうにもできず〔同輩なら、この言葉を使用しません〕、悲しみの感情があふれており、それに耐えられません。謹んで書状をととのえ〔同輩は、「ととのえ」を「たてまつり」とします〕、感謝を申し上げます〔同輩なら、「感謝を申し上げます」を「陳謝いたします」とします〕。謹んで記す。〔その他は、いずれも前と同じです。ただし封皮は、「霊簾」という文字を使用しません〕

3. 慰人父母亡疏～人の父母が亡くなったのを慰める書簡

私が頓首し、再拜して言います〔降等は、「頓首」とします〕。不意の凶變（不孝）があり〔死者の官位が高ければ、「邦国の不幸」とします。以後は、すべてこれを手本とします〕、先某位（なにになに様）が〔官位が高ければ、「先府君」とします。有契（先祖から代々にわたり仲良くしている間柄）であれば、「某位府君」の上に「幾丈」を加えます。母は、「先の某封」と言います。封（爵位）が高ければ、「先の夫人」と言います。責任者となっているときには、「尊祖考某位」「尊祖妣某封」と言います。その他はいずれも同じです〕、たちまち榮養（生命）を放棄されました〔死者の官位が高ければ、「たちまち館舎（住居）を棄てられました」とします。場合によっては「たちまち薨逝（死去）されました」とします。母の封から夫人までも、「薨逝」とします。もし生きている人が官位をもっていなければ、「たちまち色養（顔色）が変わりました」とします〕。訃報を受け、驚き悲しんでおり、その気持ちをどうにもできません。伏して思いますに〔同輩は「忝しく思いますに」とし、降等は「はるかに思いますに」

とします]、孝行の気持ちは純粹なものであり、思い暮って息もたえるくらいに泣き叫ばれ、じっとしてられないのではないのでしょうか。日月は流れゆき、あつという間に旬朔（10日間もしくは1か月）をこえてしまいます〔時を経過していれば、「すでにあつという間に時間が経過してしまいました」とします。すでに埋葬していれば、「あつという間に喪事（埋葬の完了）を経過しました」とします。卒哭、小祥、大祥、禫除は、それぞれその時に従います]。悲しみ傷ついた気持ちがどれほどであるか、ご両親のご恩はどれほどであるか、それが分らずにみずからも哀しみ傷ついております〔父が存命で、母が死去していれば、「心配し苦しんでおります」とします]。気力はいかがでしょうか。伏して乞いたいのですが〔同輩は「伏してお願いしたいのですが」とし、降等は「ただこいねがうのですが」とします]、無理やりお粥をプラスされ〔埋葬し終わっていれば、「熟食（粗末な食事）」とします]、伏して礼法のしきたりに従ってください。私は仕事にしばられており〔官位にあれば、「離れられない仕事があり」とします]、いまだに慰めに急ぎようがありませんが、その心配で思いわびる気持ちにおいては、自分の感情をどうにもできず〔同輩以下は、ただ「私は慰めを差し上げようがありませんが、悲しみにとらわれて落ち着かない気持ちは深まっていくばかりです」とします]、謹んで書簡を差し上げます〔同輩は、「書簡」を「書状」とします]。伏して思いますに、この辺の事情は、どうかご推察ください〔同輩以下は、この文章を削除します]。乱文お許しください。謹んで記します〔同輩は、「不適正な表現お許しください。謹んで記します」とします]。

○月×日 具位〔降等は「郡望」を使用します] 姓某 某官大孝（父の喪に服している人と言う言葉）〔苦前]に書簡を差し上げます〔同輩は、「書簡」を「書状」とします。母が亡くなったときは「大孝」を「至孝」とします。同輩以下は、「苦次」とします]。

封皮（手紙を包むためのもの）に記すこと～某官大孝〔苦前]に書簡を差し上げます。具位姓某（差出人の名前）、謹んで封じます〔降等であれば、面僉を使用し、「某官大孝苦次に書状を差し上げます。郡望姓名、記して謹んで封ず」とします。もし母が亡くなったことをお悔みするものであれば、「大孝」を「至孝」とします]。

重封（封皮を包むためのもの）に記すこと～某官に書簡を差し上げます〔同輩は、「書状を差し上げます」とします]。具位姓某（差出人の名前）、謹んで封ず。

4. 父母亡答人慰疏〔嫡子の本妻が生んだ男子で責任者となっている人も同じです]～父母が亡くなったときに人の慰めに答える書簡

私が稽首し、再拝して言います〔降等は「叩首」です]。私の罪悪は深く重く、

禍（わざわい）を先考（父）に及ぼしてしまいました〔母は、「先妣」とします。責任者となっているときには、祖父は「先祖考」とし、祖母は「先祖妣」とします〕。死者の名を呼び、泣き悲しみ、内臓がばらばらになりそうであり、地を叩き、天に叫んでも、どうにもなりません。月日はじっとしておらず、あっという間に旬朔（10日間もしくは1か月）をこえてしまいます〔随時にします。前に同じです〕。ひどく罰せられるべきであり、罪がはなはだしいことには〔父が存命で、母が死去していれば、「ひとかた罰せられるべきであり、罪が深いことには」とします。祖父母も、これのようにします〕、命を救うことに望みがなくなりました。その日のうちに恩をこうむり〔同輩以下は、この文章を削除します〕、謹んで几簾（お供え物をするところ）をおしいただき、かりそめに生きながらえております。尊慈（ありがたい心配り）をいただき、慰問をたまわりました。哀しみの感情があふれており、自分の感情をどうにもできず〔同輩以下は、「尊慈（ありがたい心配り）を受け、慰問をくださりました。私は悲しみの感情のため、とにかく自分の感情をどうにもできず」とします。降等は、「慰問を受けました。悲しみの感情が本当に深いですし」。司馬公は、こう言っています。「およそ父母の喪に服することになって、古くからの顔なじみが手紙をよこして弔問しないのは、哀れみ合う心がないのであり、礼法においては先に手紙を出すべきではありません。やむをえず先に手紙を出さざるをえないならば、「尊慈（ありがたい心配り）をいただき、慰問をたまわりました。哀しみの感情があふれており、自分の感情をどうにもできず」の部分削除します〕、いまだときにも訴え叫びようがなく、落胆に耐えられず、謹んで書簡を差し上げます〔降等は、「書簡」を「書状」とします〕。心が荒み迷っており、言葉が続きません。謹んで書簡を記します〔降等は、「書簡」を「書状」とします〕。

○月×日 孤子〔母の喪に服しているときは「哀子」と称します。両親が亡くなっているときは「孤哀子」と称します。責任者となっている人は「孤孫」「哀孫」「孤哀孫」とします〕 姓名、某位（なにになに様）に書簡を差し上げます〔末尾に「謹空」と書きます。同輩以下は、これを取ります〕。

封皮と重封は、いずれも前と同じです。

5. 慰人祖父母亡啓状〔責任者ではない人のことです。伯父、叔父、伯母、叔母、姑、兄、姉、弟、妹、妻、子、甥、姪は同じです〕～人の祖父母が亡くなったのを慰める書状

私が申します。不意の凶変（不孝）があり〔子や孫は、この句を使用しません〕、尊祖考某位（あなたの祖父のなにになに様）がたちまちに違世（死去）されました〔祖母は「尊祖妣某封」とします。無官、無封、有契の場合は、上記のとおりです。伯父、叔父、伯母、叔母、姑には、「尊」の字を付け加えます。兄、

姉、弟、妹には、「令」の字を付け加えます。降等には、すべて「賢」の字を付け加えます。この一等の親族が数人いるのであれば、序列をつけ、「幾某位」とします。無官であれば「幾府君」とします。有契であれば、「某位府君」の上に「幾丈」や「幾兄」を付け加えます。姑、姉、妹はと言うと、夫の姓を称し、「某宅尊姑令姉妹」とします。妻はと言うと、「賢閨某封」とします。無封であるときには、ただ「賢閨」とします。子は「伏承令子幾某位」とします。甥や姪や孫はいずれも同じです。訃報を受け、驚き悲しんでおり、やむにやまれぬ思いです〔妻であるときには、「驚き悲しむ」ではなく、「驚きあわてる」とします。子や孫は、ただ「驚き悲しみに耐えられません」とします〕。伏して思いますに〔同輩は「伏してお願いしたいのですが」とし、降等は「ただこいねがうのですが」とします〕、孝行の気持ちは純粹なものであり、もだえて張り裂けんばかりであり、どうして耐えられるのでしょうか〔伯父、叔父、伯母、叔母、姑ならば、「親愛の情は高いものであり、ひどく悲しく、はげしく悲しくて、耐えられません」とします。兄、姉、弟、妹はと言うと、「友愛の情は高いものであり」とします。妻はと言うと、「夫婦の義は重く、悲しみ痛み、はげしく悲しくて」とします。子、甥、姪、孫はと言うと、「慈愛の念は深いものであり、ひどく悲しく、はげしく悲しくて」とします。その他は、伯父、叔父、伯母、叔母、姑は同じです〕。初春でも寒い感じであり〔その時その時に応じて変更します〕、お体のほうはいかがであるのか分かりませんが〔降等は、「なにをなされているのか分かりませんが」とします〕、伏して乞いたいのですが〔同輩以下は、前のようにします〕、みずからの悲しい気持ちをゆるめ抑えて、ご両親のお気持ちを慰めてあげてください〔その人に父母がいないならば、ただ「遠い先のことに心をくばってください」とします。続けて書き、文章の頭を改行して頭にもってきたりしません〕。私は仕事にしばられており〔官位にあるときには、前のようにします〕、いまだに慰めに駆けつけようがありませんが、その心配な気持ちにおいては、自分の感情をどうにもできず〔同輩以下は、前のようにします〕、謹んでお手紙を差し上げます。伏して思いますに、この辺の事情は、どうかご推察ください〔同輩以下は、前のようにします〕。乱文お許しください〔同輩以下は、前のようにします〕。謹んで記します。

○月×日 具位姓名（肩書きと名前） 服前〔同輩ならば「服次」とします〕のなにになに様にお手紙を差し上げます。

封皮と重封は、前と同じです。

6. 祖父母亡答人啓状〔責任者ではない人のことです。伯父、叔父、伯母、叔母、姑、兄、姉、弟、妹、妻、子、甥、姪は同じです〕～祖父母が亡くなったときに人の慰めに答える書状

私が申します。家門（わが家）に因禍（わざわい）があり〔伯父、叔父、伯母、叔母、姑、兄、姉、弟、妹ならば、「家門に不幸があり」とします。妻ならば、「私の家に不幸があり」とします。子、甥、姪、孫ならば、「私の一門に不幸があり」とします〕、先祖考（祖父）〔祖母は「先祖妣」とします。伯父、叔父、伯母、叔母は「幾伯父」「幾叔父」「幾伯母」「幾叔母」とします。姑は「幾家姑」とします。兄、姉は「幾家兄」「幾家姉」とします。弟、妹は「幾舎弟」「幾舎妹」とします。妻は「室人」とします。子は「小子某」とします。甥、姪は「従子某」とします。孫は「幼孫某」とします〕がたちまちに棄背（死亡）し〔兄、弟より下は「喪去」とします。子、甥、姪、孫は「あつという間に天逝した」とします〕、痛みと苦しみは張り裂けんばかりであり、私は耐えられません〔伯父、叔父、伯母、叔母、姑、兄、姉、弟、妹ならば、「打ちひしがれて傷つき、つらくて苦しく、私は耐えられません」とします。妻は「打ちひしがれて傷つき」を「ひどく悲しく」とします。子、甥、姪、孫は、「ひどく悲しく」を「悲しみが心を離れず」と改めます。〕。尊慈（ありがたい心配り）をいただき、わざわざ慰問をたまわりました。哀しみの感情があふれており、自分の感情をどうにもできず〔同輩や降等は、前のようにします〕、初春でも寒い感じがす〔その時その時に応じて変更します〕。思いますに〔同輩は「伏してお願いしたいのですが」とし、降等は「ただこいねがうのですが」とします〕、あなたのお体のほうは、起居がお健やかでいらっしゃるようです〔同輩は「起居」を言いません。降等はただ「動静がお健やかでいらっしゃるようです」とします〕。私は、今日は父母の世話をすることができ〔父母がいないなら、この句を使用しません〕、幸いにして他の苦しみを免れることができているのですが、どこにも哀しみを訴え出ようがなく、いたずらに悲しみでのどのつかえが増すばかりです。謹んでお手紙を差し上げ、お礼を申し上げます〔同輩は「陳謝いたします」とします〕。乱文お許しください〔同輩以下は、前のようにします〕。謹んで記します。

○月×日 某郡（住所） 姓名（氏名） なになに様にお手紙を差し上げます。
封皮と重封は、前と同じです。